

■ミニチュア炊飯具■

一須賀古墳群を特徴づける副葬品の一つに、ミニチュア炊飯具があります。

竈（かまど）、甕（かめ）または釜、甑（こしき）、鍋といった、炊飯の道具をかたどった素焼きの焼き物です。

サイズが小さいこと、火を受けた痕跡がないことからみて、実用品ではなく、副葬のためだけに作られたと考えられます。

さて、一須賀古墳群では約 20 基から出土しているミニチュア炊飯具ですが、日本のどこでも出土する資料ではありません。

出土するのは、一須賀古墳群が位置する南河内地域の東北部、奈良県中部、滋賀県の大津市一帯などに限られます。

そして、これらの地域は、ミニチュア炊飯具と一緒に出土する副葬品などと併せて、朝鮮半島からの渡来人との結びつきが強いと考えられる点が重要です。

例えば、一須賀古墳群で特徴的な副葬品として釵子（さいし／かんざし）がありますが、この釵子も渡来系の資料と考えられており、出土範囲がミニチュア炊飯具と類似しています。

そもそもミニチュア炊飯具は、移動式の竈や甑など渡来系の文物をかたどったものです。

そう考えれば、渡来人と何らかの関わりをもった人びとのお墓にミニチュア炊飯具が副葬されたとみて、まず間違いないでしょう。